

日本語を第二言語とする書き手の文章産出研究 の枠組みの提案

衣川 隆生

要 旨

1970年代前半から第一言語による作文の研究の焦点は「書いたもの(成果物)」から「書く過程」へと移行してきた。この研究の焦点の移行には、効率的な書き手と非効率的な書き手の文章産出過程における特徴の差や書き上げた文章に見られる問題点が文章産出過程のどの段階でいかに生じたかを観察する方が効果的な指導方法を確立できるという考え方がある。日本語を第二言語とする書き手の作文研究の焦点も1990年代初頭から第一言語による文章産出過程研究の知見に基づき、「書く過程」へと移行してきた。しかし、これらの研究の間には共通の枠組みが存在しないために、個々の研究者が行っている研究結果を比較、検証できないという問題点がある。そこで、本研究では、文章産出過程の構成概念とそれに影響を与える要因を定義し、その応用の可能性を検討することとする。

【キーワード】 構成概念 特徴 文章産出方略 文章産出スタイル

A Proposal for a Framework for Analyzing the Writing Process of Japanese Learners

Kinugawa, Takao

Since the early 1970s, the focus of first language composition research has begun to shift from the written product to the writing process. Behind this shift, there was an assumption that analysis of the writing process is more suggestive than analysis of the written product for revealing differences between effective and ineffective writers, and for detecting the causes of problems that are observed in written text. From the early 1990s, composition research in Japanese as a second language has also begun to look at what is known about the writing process from L1 composition research. However the findings of those studies can not be compared with each other because of differences in the framework used. In present study, the author will define the constituent conception of the writing process and the factors that influence it. The validity of the framework will also be examined.

1. はじめに

本研究の目的は、日本語を第二言語とする書き手(以下、J L 2 と略す)の文章産出過程を分析するための構成概念を定義することにある。

1970年代前半から第一言語による作文研究の焦点は「プロダクト(成果物) = 書いたもの」から「プロセス = 書く過程」へと移行してきた。第二言語による作文研究の焦点も1980年代初頭から第一言語による文章産出過程研究の知見に基づき、「書く過程」へと移行してきた。

この研究の焦点の移行には、次のような背景があると考えられる。従来の指導法では、学習者が書き上げたものを教師が添削し、その添削の過程で学習者の問題点を把握する方法が採られてきた。しかし、学習者が書いた文章には、表記、語彙、文法・文型、談話構造、ジャンル、文体など様々な問題点が存在する。それらの問題点が、どのような原因でいかに生じたかを把握するには、書き手が文章を「書く行為そのもの」を観察したほうがより効果的な指導方法を確立できると考えられたからである。

しかし、Kraples (1990) が指摘するように、第二言語による文章産出過程の研究には、1) ほとんどの調査が第一言語による文章産出過程研究をガイドラインとして行なわれている、2) 作文課題が様々であるなどの問題点が存在する。この問題が生じた背景には、第二言語による文章産出に影響を与える要因にはどのようなものがあるか、その文章産出過程とはどのようなものであるか、文章産出過程の特徴はどのように把握できるか、という概念規定がこれまで行われてこなかったことがあると考えられる。

そこで、本稿では、1) J L 2 の文章産出に影響を与える要因にはどのようなものがあるか、2) J L 2 の文章産出過程とはどのようなものか、3) J L 2 の文章産出過程の特徴を把握するためにはどのような概念を用いればいいかを検討し、J L 2 の文章産出過程研究の枠組みを提案することを目的とする。

2. 文章産出に影響を与える諸構成概念

2.1 Hayes & Flower (1980) の文章産出モデル

文章産出過程とは目標指向的な一種の問題解決過程であると考えられる。では、問題解決過程としての文章産出過程とはどのような過程であろうか。

Hayes & Flower (1980) は、文章産出過程を問題解決過程の一種類としてとらえ、英語を第一言語とする書き手がどのように文章を書き上げていくかを、発話思考法(think - aloud method)を用いて推定し、図1のような文章産出過程のモデルを提案している。

このモデルでは、文章を書き上げるという活動は「課題状況」「長期記憶」「文章産出過程」の三つの部門から構成されている。

「課題状況」とは、観察可能な外在的状況であり、話題、読み手、動機付けを含む作文課題、ある時点までに書き上げられた文章が含まれる。まず、書き手は自分に与えられた課題、何について書く

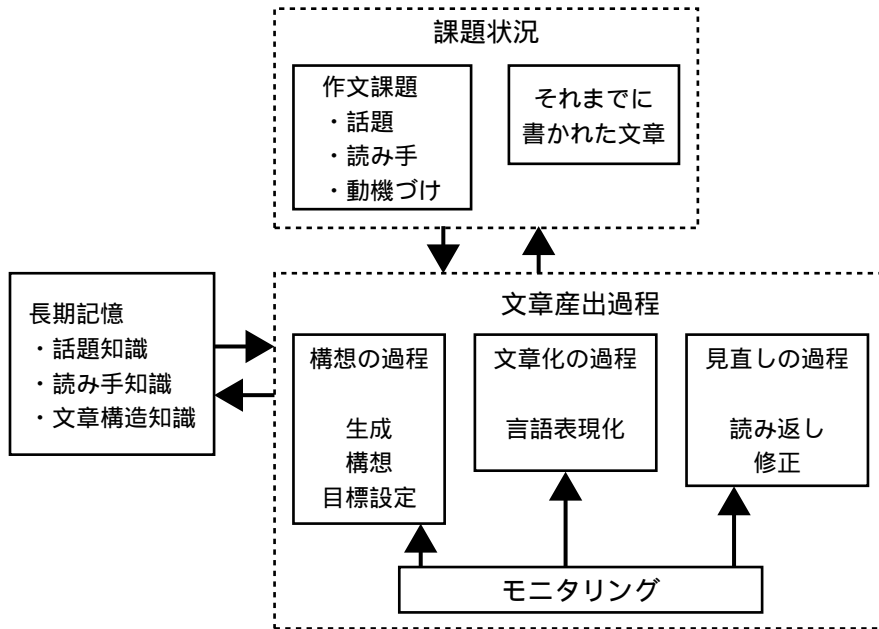


図1 文章産出のモデル (Hayes & Flower, 1980より)

のか、誰に書くのか、何のために書くのかを認識し、その認識が刺激となって文章産出が始まる。

文章産出過程は、大きく「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」という3つの下位過程から構成されている。「構想の過程」とは、「プランを考え出す」という下位目標を達成するための下位過程であり、この過程はさらに「生成」、「構成」、「目標設定」という三つの下位過程から構成されている。作文課題を与えられると、書き手は作文課題と関連のある情報を長期記憶の中から検索し、必要な情報を記憶に留め（生成）、それらの情報を選択・整理して、文章のプランを作る（構成）。また、文章産出がプラン通りに進行しているかどうかをチェックするための基準を明確にし記憶する（目標設定）。この過程は、書き始める前だけではなく、文章を書いている途中でも行われ、その結果、プランが修正されたり拡大されたりすることもある。

次の、「文章化の過程」とは、「『構成の過程』で生成されたプランを言語表現化する」という下位目標を達成するための下位過程であり、この過程では、生成したプランを言語表現に置き換えて、それを原稿に書き下ろす。

そして、「見直しの過程」とは「書いた文章の質を高める」という下位目標を達成するための下位過程であり、この過程はさらに「読み返し」と「修正」という二つの下位過程から構成されている。この過程では、書き上げた文章を「読み返し」、必要があれば、「修正」を加える。

2.2 Hayes & Flower (1980) の文章産出モデルの問題点

Hayes & Flower (1980) のモデルを J L 2 の文章産出過程の分析に応用した場合には、大きく以下

の四つの問題点が存在すると考えられる。

第一に、課題状況にそれまでに書かれた文章しか成果物として含まれていないことが挙げられる。衣川(1997)で中国語を母語とするJL2は、「起承転結」、「四段落」と文章構成をメモ用紙に書き下ろし、その文章構成に沿う内容を検索し、内容が計画されたらすぐに文章を書きはじめている。このような文章産出過程の中間段階に相当するメモ、アウトラインも文章産出過程の意志決定を推測する上で非常に重要な役割を果たす。

また、衣川(1996)では、中国語を母語とするJL2が説得文を産出する際に、プランに対して多角的な評価を行ない、その結果「読み手を説得するために、危ない話題は避ける」という目標を設定し、その目標に基づいて、新しい内容プランを生成している。このようなプロトコルデータを分析しなければ出てこない内在的な成果物も、文章産出過程で何が行われ、何が作り出されたかを推定するためには非常に重要である。

さらに、外在的状況としては、辞書などの「リソース」があるかどうか、「媒体」として手書きなのかワープロを使用しているのかは文章産出過程に大きく影響を与えると考えられる。

第二に、課題状況の作文課題に話題、読み手、動機付けしか含まれていないことが挙げられる。杉本(1991)は「あなたの考えを述べる文章を書いてください」という課題と、書き手と読み手の立場・関係、どういう種類の文章か、何を主張するのかなどを明記した課題を与えた場合、後者の課題のほうが、知識の新たな明確化・統合が促されることを指摘している。このように文章産出過程に影響を与える書き手と読み手の立場・関係、文章の種類、文章の目的などの要素は、作文課題として記述する必要があるだろう。

第三に、書き手の長期記憶が、話題に関する内容的知識、読み手に対する知識、文章に関する知識でしか構成されていないことが挙げられる。Lay(1982)は、文化拘束的な話題についてのプランを生成する際に、母文化・社会についての知識を多用することを指摘している。また、英語を第二言語とする書き手の文章産出過程を分析した先行研究では、文章化の過程で言語的な問題、特に語彙的な問題が生じた際には第一言語の知識を使用するという指摘もある(Zamel, 1982., Jones & Tertoe, 1987)。このように、第二言語による文章産出過程では、母文化・社会についての知識と第一言語の知識が利用される。したがって、書き手の長期記憶を大きく母文化・社会についての知識、母語知識と対象文化・社会についての知識、言語知識に分けて分析する必要があるだろう。

最後に、「見直しの過程」の、「読み返し」と「修正」の概念定義に問題があると考えられる。衣川(1993)では、6人のJL2全てが文章産出過程で「読み返し」を行っている。しかし、それらの行動の目標は異なっている。中国語を母語とする書き手は、結論の段落の内容を計画するときに、それまでに書いてきた文章を読み返し、それまでに書いてきた段落の主題を「要約」し、それらを使って結論の「計画」を行なっている。この読み返しは「プランを考え出す」という目標を達成するための行動である。また、ある表現を書きおろしたところで、その表現を「読み返し」、それに刺激を受け、次に続く表現を想起している。この読み返しは「『構成』で生成されたプランを言語表現化する」と

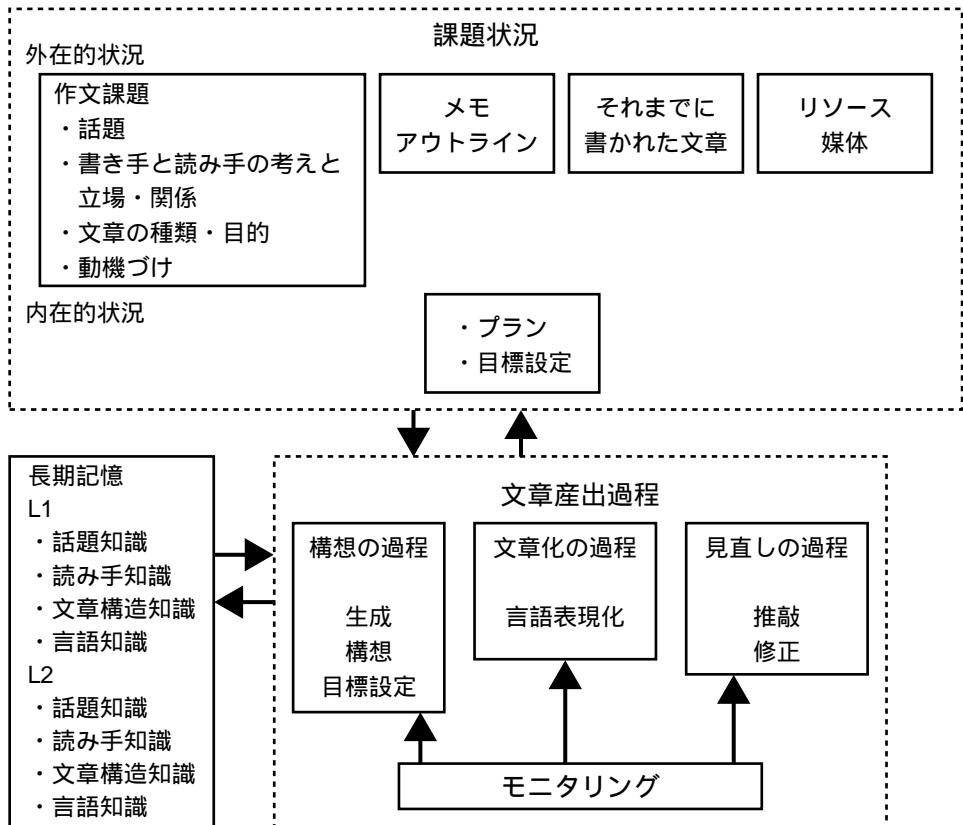


図2 文章産出のモデル

いう目標を達成するための行動である。

これまで、「読み返し」は「文章の質を高める」きっかけとなる行動であるという指摘が多かった (Raines 1985, Zamel 1983)。しかし、上記のように「読み返し」は「構想の過程」でも「文章化の過程」でも観察される。したがって、特に「見直しの過程」だけに「読み返し」を下位過程として含む必要はないであろう。

また、Raines (1985)、Arndt (1987) は、英語を第二言語とする書き手の文章産出過程を分析する際、「修正」を細分化している Perl (1978) のコーディング・スキーマを利用して「修正」と「推敲」を分けて分析を行っている。その結果、効率的な書き手は「修正」と同様、「推敲」も行うが、非効率的な書き手は正確さにはあまり気を払わず、そのため修正も少ないことを指摘している。ここでいう「修正」とは、「正確さのために書き換える」行動であり、「推敲」とは、「アイデアを明確に伝えるために内容を書き換える」行動を指す。このように一言で「書いた文章の質を高める」と言っても「修正」と「推敲」は効率的書き手が非効率的書き手を分ける文章産出過程の特徴ともなっている。したがって、「見直しの過程」の下位過程として「修正」と「推敲」を設ける必要があるだろう。

上記の考察をもとに、文章産出過程に関わる構成概念を再度定義すると、以下のようになる(図2

参照)。

- 1) 文章産出過程は、文章を書き上げるという目標に到達するために、現在の状態を変換していく一種の問題解決の過程である。
- 2) 文章産出に関わる要因には、課題状況、書き手の長期記憶、文章産出過程がある。
- 3) 課題状況は、外在的状況と内在的状況により構成される。外在的状況は、作文課題、メモ・アウトライン、それまでに書かれた文章、リソース、媒体により構成され、内在的状況は、設定目標、プランにより構成される。
- 4) 作文課題を規定する要因として、話題、書き手と読み手の考え・立場・関係、動機付け、文章の種類、文章の目的が考えられる。
- 5) 書き手の長期記憶は、大きく書き手の母文化・社会についての知識と対象文化・社会についての知識に分けられる。それぞれの知識は話題、読み手、文章構造、言語についての知識によって構成される。
- 6) 文章産出過程は、「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」という三つの下位過程から構成される。三つの下位過程にはそれぞれに達成すべき目標が存在する。構想の過程には「プランを考え出す」、文章化の過程には「プランを言語表現化する」、見直しの過程には「書いた表現を整え磨く」という目標がある。本研究では、これらの目標を文章産出過程における下位目標と呼ぶ。「構想の過程」はさらに、「生成」「構想」「目標設定」という下位過程に分類され、「見直しの過程」は「推敲」と「修正」という下位過程に分類される。

3. 文章産出過程の特徴

3.1 文章産出行動・文章産出方略

ここでは、JL2の文章産出過程の特徴を把握するための概念を検討する。

初期の第二言語による文章産出過程研究は、第二言語学習者による文章産出過程の特徴を網羅的に把握することを目標としていた。その中でも特に第二言語学習者の非効率的書き手と効率的書き手の文章産出過程の差に焦点をあてた研究が中心であった。その後、第一言語による文章産出過程では観察されない、第二言語による文章産出過程の特徴を把握することに焦点が当てられるようになってきた。その際に用いられた分析の基準としては、Perl (1978) の行動コード表に基づき、文章産出過程の行動の量を頻度、時間的に分析し、それを文章産出過程の特徴としている研究が多い (Zamel, 1983., Raimes, 1985., Arndt, 1987., So, 1989., 大竹他, 1993)。例えば、大竹他 (1993) では、文章産出過程で観察された行動を作文課題を達成するために用いる手段として捕らえ、それらをストラテジーと呼んでいる。

しかし、問題解決過程の分析の枠組みで考えられるストラテジー、あるいは方略とは、目標により近い状態に移行するための目標指向的な行動である。上述したように、「読み返し」という行動は、構想の過程、文章化の過程、見直しの過程の下位過程を達成するために行われている。本稿では、同

じ行動であっても、目標が異なれば「方略」の範疇は異なるを考える。

したがって、書き手の文章産出過程の特徴を把握する際には、「行動」と「方略」という二つの概念を以下のように区別する必要がある。

「文章産出行動」とは、文章を書き上げる過程で、書き手が行う具体的な「物理的・心理的行動」である。

「文章産出方略」とは、目標により近い状態に移行するための目標指向的な行動である。同じ「行動」であっても、目標が異なれば「方略」の範疇は異なる。

3.2 文章産出スタイル

では、「文章産出行動」と「文章産出方略」を分析すれば、書き手の文章産出過程の特徴を網羅的に記述できるであろうか。

衣川(1995)では、JL2の非効率的な書き手と効率的な書き手の文章産出過程を分析し、非効率的な書き手の文章産出過程では文章を書き始める前に構想の過程が観察されたのに対して、効率的書き手はプランを生成するための構想の過程は観察されなかったことを指摘している。そして、この結果について、効率的書き手は文章をどのように構成すればいいかのプランを既に内在化していたために、内容を詳細に計画する必要がなかったのではないかという可能性を示唆している。また、非効率的書き手が文章を書いている段階では、書き下ろすことが中心的な目標となっており、見直しの過程はほとんど生起していないのに対して、効率的書き手は最初に自分が表現したい内容を一気に書き下ろし、それを読み返しながら徐々に良い表現に変えるというように、文章化の過程と見直しの過程が交互に現れている。

このように、「構想の過程」「文章化の過程」「見直しの過程」の三つの過程が文章産出過程のどの部分でどのような頻度で生起するかもJL2の文章産出過程の特徴の一つとして挙げられる。

「文章産出行動」と「文章産出方略」が書き手の下位過程の特徴を微視的に把握する概念だとすれば、文章産出過程における下位過程の生起状況は、書き手の文章産出過程の特徴を巨視的に把握する概念である。

そこで、本稿では、文章産出過程の特徴を巨視的な視点で把握するための概念として、以下の文章産出スタイルを提案する。

文章産出スタイルとは、文章産出過程における「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」の生起の分布の特徴である。

具体的には、以下の手順で文章産出スタイルの定義を行うこととする。

書き手の文章産出過程では、「文章化の過程」が中心的な位置を占めている。したがって、書き手の文章産出スタイルは「構想の過程」と「見直しの過程」が「文章化の過程」とどのように関わっているかによって分類する。

まず「文章化の過程」を基準にして、文章産出過程を4段階に分割する。第一の段階は「最初の『文章化の過程』が生起する前の段階(pre-writing stage)」である。この段階を以下「PWS」と表すことにする。第二、第三の段階は「文章化前半」と「文章化後半」、そして、「最後の『文章化の過程』が生起した後の段階」として「文章化終了後の段階」を設ける。「文章化前半」と「文章化後半」の境界は「文章化の過程」の文章産出行動が半分終了した時点に置くことにする。

次に、書き手の文章産出スタイルを次の基準で分類する。

- 1) 「構想の過程」がPWSと文章化前半に現れる文章産出スタイルを「先行プラン型」とする。
- 2) 「構想の過程」が「文章化前半」と「文章化後半」を通して継時的に現れる文章産出スタイルを「継時プラン型」とする。
- 3) 文章産出過程の後半で「構想の過程」が現れる文章産出スタイルを「後行プラン型」とする。ただし、これらの型が「先行プラン型」と複合して現れる場合には「先行プラン+後行プラン型」という形で表す。
- 4) 「見直しの過程」が「文章化全体」を通して継時的に現れる文章産出スタイルを「文章化-見直し相互交渉型」とする。
- 5) 「文章化後半の段階」から「見直しの過程」が現れる場合には「後行見直し型」と表す。ただし、これらの型が「文章化-見直し相互交渉型」と複合して現れる場合には「文章化-見直し相互交渉+後行見直し型」という形で表す。

4. 文章産出スタイルの有効性の検討

ここでは、衣川(1996)の資料を文章産出スタイルという概念を用いて再度分析することにより、文章産出スタイルの有効性を検討する。

衣川(1996)では、「意見を述べてください」という意見文課題と「反対の意見を持つ者を説得する文章を書いてください」という説得文課題を中国語を母語とするJL2に与え、作文課題の差が文章産出過程にどのような影響を与えるかを分析している。分析の結果、文章産出方略レベルでは、1)意見文課題では主に次に何を書かしか計画していないのに対して、説得文では文章を書きながら課題を読み返し、読み手や目的に合わせて文章全体の内容や構成を再度計画している。2)意見文では表現方法に焦点を当てた推敲しか観察されなかったのに対して、説得文では、新しいプランに合わせて内容にも焦点を当てた推敲が行われている、という差が示されている。

では、文章産出スタイルのレベルではどのような差が生じるであろうか。

図3に意見文における下位過程の生起状況、図4に説得文における下位過程の生起状況、表1に「構想の過程」と「見直しの過程」にかけている時間配分を示す。

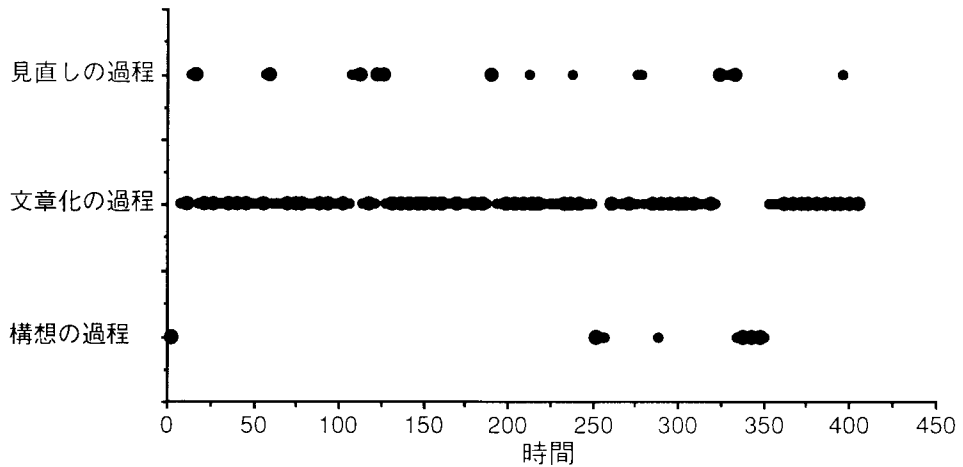


図3 意見文における下位過程の生起状況

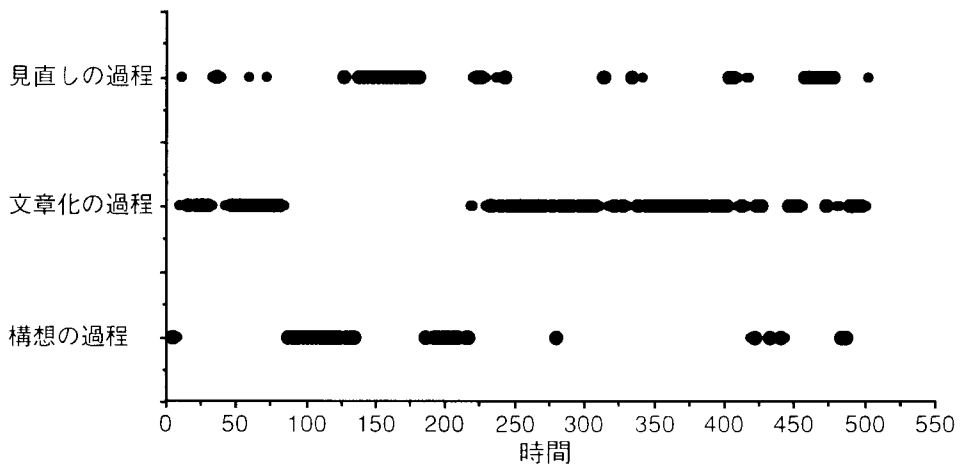


図4 説得文における下位過程の生起状況

表1 下位過程の生起分布の状況

| 課題 | | 意見文課題 | 説得文課題 |
|--------|--------|--------------|---------------|
| 構想の過程 | P W S | 0分15秒 (0.7%) | 0分20秒 (0.8%) |
| | 文章化前半 | 0分0秒 (0.0%) | 6分40秒 (15.9%) |
| | 文章化後半 | 2分00秒 (5.9%) | 1分40秒 (4.0%) |
| 見直しの過程 | 文章化前半 | 1分50秒 (5.4%) | 5分45秒 (13.7%) |
| | 文章化後半 | 1分20秒 (3.9%) | 2分50秒 (6.8%) |
| | 文章化終了後 | 0分00秒 (0.0%) | 0分05秒 (0.2%) |

図3、図4、表1から、どちらの課題でもPWSでは「構想の過程」はほとんど生起していないことがわかる。しかし、「文章化前半」と「文章化後半」で「構想の過程」が生起する比率は、課題によってかなり異なる。意見文課題では、「文章化後半」において約6%の比率で「構想の過程」が生起しているだけであるが、説得文課題の「文章化前半」では16%、「文章化後半」でも4%の比率で「構想の過程」が生起している。

また、どちらの課題でも「文章化全体」を通して「見直しの過程」が継続的に生起している。これらの結果から、この書き手の文章産出スタイルは、1)課題によって構想の過程が影響を受け、2)意見文課題では「後行プラン、文章化 - 見直し相互交渉型」、説得文課題では「継時プラン、文章化 - 見直し相互交渉型」であると考えられる。

以上のような文章産出方略レベルと文章産出スタイルのレベルの分析結果を合わせると、課題が文章産出過程に与える影響は次のように精緻化できるであろう。

- 1) 課題によって、「構想の過程」は、生起場所、生起頻度、方略レベルで影響を受ける。意見文では「後行プラン型」で生起頻度も低く主に次に何を書くかしか計画していないのに対して、説得文では「継時プラン型」で生起頻度も高く、読み手や目的に合わせて文章全体の内容や構成を継続的に計画するという特徴が観察される。
- 2) 「見直しの過程」の生起場所はどちらの課題でも「文章化 - 見直し相互交渉型」であるが、生起頻度、方略レベルでは差が観察される。意見文では「見直しの過程」の生起頻度が低く主に表現方法に焦点を当てた推敲しか観察されないのに対して、説得文では「見直しの過程」の生起頻度が高く内容にも焦点を当てた推敲が行われるという特徴が観察される。

5. 今後の課題

本稿の目的は、文章産出に関わる諸要因を規定すること、文章産出過程の構成概念を規定すること、文章産出過程の特徴を把握する概念を規定し、その有効性を検討することにあった。考察の結果、

- 1) Hayes & Flower (1980) の文章産出モデルの問題点を指摘し、課題状況、長期記憶、文章産出過程の構成概念を精緻化した。
- 2) 文章産出過程の特徴を把握する概念として、微視的な範疇として文章産出行動と文章産出方略を区別すべきこと、巨視的な範疇として文章産出スタイルを提案した。
- 3) 文章産出方略と文章産出スタイルという概念を用いて文章産出過程を分析することにより、文章産出過程の特徴を精緻化することができた。

今後は、本稿で提案した分析の枠組みを用いてJL2の文章産出過程の分析を行うことにより、この枠組みを精緻化していくとともに、この枠組みを利用して、以下の課題の検討を行う必要がある。

- 1) 課題状況(作文課題、媒体、リソース)は、文章産出過程と書き上げた文章にどのような影響を

与えるか。

- 2) 長期記憶にある既存の知識の量、及び質は、文章産出過程と書き上げた文章にどのような影響を与えるか。
- 3) 効率的書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴は、どのように異なるか。

引用文献

1. Arndt, V. (1987) Six writers in search of tests: A protocol based study of L1 and L2 writing, *ELT Journal*, 4:257-267
2. Hayes, J. R. & L.S. Flower. (1980) Identifying the organization of writing processes, In Gregg, L. & E. Steinberg (eds.), *Cognitive processes in writing*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers
3. Jones, S., & Tertoe, J. (1987) Composing in a second language, In A. Matsuhashi (ed.), *Writing in real time: Modelling Production processes*, p.34-57. Norwood, N.J.
4. Kraples, A. (1990) An overview of second language writing process research, In Kroll, B. (ed.), *Second Language Writing*, Cambridge
5. Lay, N. (1982) Composing process of adult ESL learners, *TESOL Quarterly*, 16:406
6. Perl, S. (1978) *Five writers writing: Case studies of the composing processes of unskilled college writers*. Unpublished doctoral dissertation, New York University.
7. Raimes, A. (1985) What unskilled writers do as they write: A classroom study of composing, *TESOL Quarterly*, 19:229-258
8. So, S. (1989) *Process and product of six college student writers: A direct observation study of L1 (English or Chinese) and L2 (Japanese) writing*. M.A Thesis, University of Hawaii.
9. Zamel, V. (1982) Writing: The process of discovering meaning, *TESOL Quarterly*, 16:195-209
10. Zamel, V. (1983) The composing processes of advanced ESL students: Six case studies, *TESOL Quarterly*, 17:165-187
11. 内田伸子(1990)『シリーズ人間の発達 1 子供の文章 - 書くこと考えること』東京大学出版
12. 大竹弘子・園田愛・広江浩一(1993)『THINK-ALOUD プロトコルを用いた日本語学習者の作文過程及びストラテジーの分析』『平成5年度日本語教育学会秋季大会予稿集』105-104
13. 衣川隆生(1995)『大学院留学生はどのように文章を書き上げているか - 効率的書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴』『JALT Journal』 Vol.17, No.2:197-212
14. 衣川隆生(1996)『作文の課題によってどのように文章産出過程が変わるか 上級日本語学習者の場合』『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12巻:89-104
15. 衣川隆生(1997)『既存プランが上級日本語学習者の文章産出過程と文章に与える影響について』『筑波大学留学生センター日本語教育論集』13巻:97-116
16. 杉本明子(1991)『意見文産出における内省を促す課題状況と説得スキーマ』『教育心理学研究』第

39卷第2号:32-41